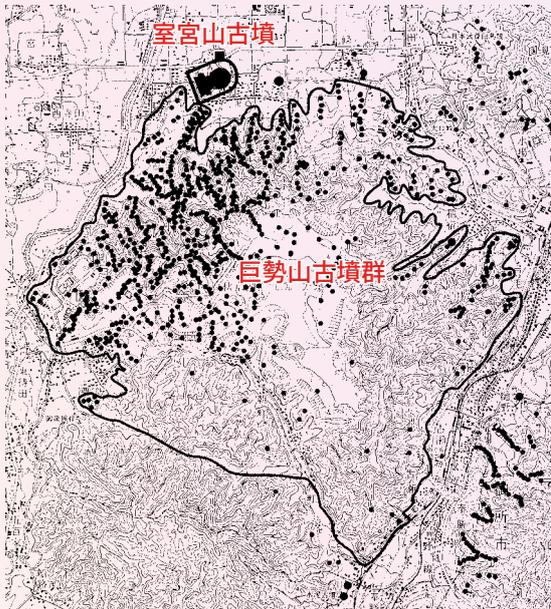


図1 巨勢山古墳群と室宮山古墳



総数約700基からなる巨勢山古墳群（うち68基は平成14年12月19日に国史跡に指定）は、室宮山古墳の築造を契機に5世紀の前葉に群形成を開始します。当初は葛城氏にまつわる人々の墓域であったと考えられ

ふるさと御所
文化財探訪

其の三十六

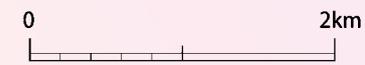
古墳時代〈24〉
葛城県の成立
巨勢山古墳群の性格①

文化財課
☎60-1608

ますが、5世紀後葉に葛城本宗家が滅亡した後も、7世紀中葉に至るまで中小規模の古墳が造られ続けます。不思議なのは、巨勢山古墳群における群形成のピーク、つまり最も多くの古墳が造られる時期が6世紀中葉にあることです。

このことから2つの命題を設定できます。1つは葛城本宗家滅亡後のおよそ6世紀以降において、なぜ巨勢山古墳群は日本最大級の群集墳となるまでに古墳の基数がふくれあがるのか、ということ。2つめには巨勢山古墳群に葬られたのはどのような人々だったのか、ということです。

白石太一郎さんは巨勢山古墳群と室宮山古墳との関係のように、大形の群集墳から見下ろす位置に前代の大形前方後円墳があることが多いことに着目し、前代の大形前方後円墳の被葬者を自分たちの共通の祖先と



みなす（擬姓的同族集団関係）実際には血縁関係はない場合も多いことにより、自らの出自の権威を高めようとする人々が集団墓地を作った場合に、このような大形群集墳が成立する、と考えました。しかし次号以降で述べるように、少なくとも巨勢山古墳群の場合

にはそのようには考えにくいのです。ここでは数回に分けて、巨勢山古墳群ならではの特殊な状況からこの命題について考えてみます。

巨勢山古墳群では、丘陵頂部から放射状に伸びてさらに手の指状に幾本にも分岐する1本1本の支尾根上に古墳が密集して築造されています。この1本1本の支尾根の単位を群集墳中における支群と呼びます。通常20〜50基程度で構成される群集墳の場合、支群は違っても群集墳全体としては等質的なのですが、巨勢山古墳群では支群ごとに個性の違いが強いのが大きな特徴となっています。

6世紀の中葉〜後葉に木棺直葬墳から横穴式石室墳へと移行する場合



写真1 巨勢山408号墳の横穴式石室



写真2 巨勢山421号墳の横穴式石室

が通有ですが、そのほかに、6世紀前葉の横穴式石室墳2基の築造のみで群形成を停止する支群（写真1）、6世紀後葉に始まり横穴式石室のみからなる渡来系の要素（遺物）の顕著な支群（写真2）、7世紀になっても木棺直葬を採用し続ける支群などさまざまな支群が形成されているかのようです。次号以降、それぞれの古墳や支群を少し詳しく見ていきましょう。

（文責 藤田和尊）

